

# 高齢期家族の社会学的研究の動向

——最近のアメリカ合衆国を中心に——

安達正嗣

はじめに

## 第1章 世代間関係論からの研究

- 1 世代間関係の現代的特徴
- 2 高齢期家族の世代間関係

## 第2章 ネットワーク論からの研究

- 1 家族・親族とネットワーク構造
- 2 サポートとしてのネットワーク

## 第3章 ケア論からの研究

- 1 家族・親族によるケア
- 2 家族と行政機関との連携

おわりに

はじめに

本稿は、アメリカ合衆国の高齢者と家族に関する最近の研究のなかで、世代間関係論、ネットワーク論、ケア論からのアプローチの研究を概観することによって、その研究の動向を探り、わが国における「高齢期家族 (later life families) の社会学」という研究分野の発展と確立の参考とするための基礎作業である。

まず、アメリカの高齢者と家族についての若干の統計について述べておきたい。表1と表2は、USセンサスから高齢化率および高齢者の居住形態の推移を示したものであり、目安として、わが国の国勢調査からの数字もあげている。

これによれば、わが国が1970年に高齢化社会に突入したのに対して、アメリカではすでにかなり以前から(1945年)突入していること、わが国のほうが高齢化率の上昇するスピードが速いとは言え、アメリカも1990年ごろから出生率の上昇により鈍化してはいるが、確実に高齢化してきたことなどがわかる。また、調査の単位が異なるために単純に比較はできないが、高齢者と家族の暮らし方としては、わが国と比べて、アメリカでは高齢期におけるひとり暮らしと夫婦のみの暮らしが圧倒的に多数をしめており、最近その傾向が強くなっていると言える。

	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年(推計)
アメリカ	9.2	9.9	11.3	12.5	12.4
日本	5.7	7.1	9.1	12.1	17.0

出典: U. S. Bureau of the Census、国勢調査。

表2 高齢者の居住形態の推移 (%)

アメリカ (個人別)

	単身	配偶者と同居	その他の家族と同居	家族以外と同居
1970年	25.5	49.0	20.7	4.8
1980年	30.3	53.6	15.9	0.2
1990年	31.0	54.1	14.6	0.3

日本 (世帯別)

	単身	夫婦のみ	子との同居	その他
1975年	8.6	13.1	64.0	14.4
1980年	10.7	16.2	60.6	12.5
1990年	14.9	21.4	51.3	12.4

出典: U. S. Bureau of the Census、国勢調査。

ここで用いている高齢期家族とは、T・H・ブルーベーカーが使いだした用語である。発達社会学的な考え方によるライフサイクル論の視点から、高齢者と家族の関係をとらえたものであるが、中年期の一部を含んだもう少し幅広いライフスパンがとられている。つまり彼によれば、高齢期家族は「空巣期 (empty nest) から退職まで」と「退職から両配偶者の死亡まで」という2つのステージを含んでいるのである (Brubaker, 1985, 1990b)。アメリカでは、もともと子の独立が比較的早いうえに、長命化が広がり、その後の人生は長期化している。とくに家族の再構成の時期でもあり、高齢期家族が家族研究において注目されるのも当然のことと言えるであろう。

## 第1章 世代間関係論からの研究

### 1 世代間関係の現代的特徴

日本社会の研究で著名なD・プラスは、近年において日本の高齢者が過去に例をみないほど長命となり、モデルのない新しい高齢期を生きることになった状況をとらえて、高齢者をこれからの時代の真の開拓者 (pioneer) と述べている (Plath, 1972)。この論文に刺激を受けたE・シャナスは、アメリカ合衆国における高齢者と家族との関係に関する論文のなかで、日本の状況と同様に、高齢者を新しい開拓者としてとらえる必要性を強調しているのである。彼によれば、とくに注目される点は、長命化によって家族関係が多世代化していることであり、後期高齢者の増加にとめない、3世代だけでなく、4世代家族も珍しくなくなっている (Shanas, 1980)。ブルーベーカーも、現代の高齢期家族は多世代化によって、新しい開拓者と呼ばれるようになってきたと述べている (Brubaker, 1985)。1960年代までの世代間関係に対する研究は、シャナスも指摘するように、もっぱら青年世代とその親世代との関係を中心としていた。しかし、1970年代以降においては高齢者と家族をめぐっての世代間関係が関心を集めていくことになったのである。

さらに、ブルーベーカーが1980年代における高齢期家族の研究の文献レビューをおこなったところによると、ベビーブーム世代（1930年代から1950年代までに生まれた世代）の高齢化によって、今後も高齢期家族の世代間関係に関する研究が増加し重要視される傾向にある。（Brubaker, 1990a）。ベビーブーム世代とその親世代の關係に注目したJ・A・ジョルダノも、この世代間には、夫婦関係、家族関係、友人関係、職場の人間関係のあり方によって、大きな違いがみられるとしている。親族関係の増大、ライフスタイルの選択範囲の拡大、個人間の関係の尊重、ケア提供者の増加、早期退職によるレジャー時間の増加などが予期された変化である。それらの変化によって、結婚および家族生活の専門家の必要性が議論されているのである（Giordano, 1988）。またブルーベーカーは、現代の世代間関係の特徴として、多世代化だけでなく、少子化の影響により世代のサイズもより小さくなっているとも指摘している。とりわけ中年世代では、高齢の世代よりも子や孫の人数が少なく、それだけに相互作用の機会は逆に拡大しており、その絆が強くなっているのである（Brubaker, 1985）。

## 2 高齢期家族の世代間関係

まず、各世代間の関係についての研究をみておきたい。

S・クリスは、高齢の親と成人子との世代間関係に対して職業的な移動が与える影響について、856組の親子を対象にして調査をしている。それによれば、移動による影響は、移動の方向、子の性別に左右されており、行動にではなく世代間の感情や認知に限られている（Kulis, 1987）。

R・T・コワードとS・J・カッターは、1980年の国勢調査（US census）のデータを活用することによって、高齢者自身の視点から多世代同居世帯の關係について探っている。子、孫、その他の親族と居住する高齢者が増加しており、2世代同居から3世代同居へと移り変わりがみられ、息子より娘との同居を選ぶ傾向がみられる（Coward & Cutler, 1991）。

またS・C・ダニエヴィクズは、高齢化率の上昇にともない、高齢者との同居を選択する家族が増加していることを指摘し、中年世代の世帯のなかに高齢の近親者がふくまれている多世代同居世帯のあり方に注目する。テキサス州における中年世代の女性への質問紙調査のデータから、高齢者が求めるものとしては、愛情は二次的であり、世帯での暮らし方が優先されていると述べている。ただし愛情は、住居形態への満足度に関連しており、サポート源としての機能をもっていることも示されている（Daniewicz, 1995）。

交換理論や資源理論（Resource Theory）は、世代間の援助交換という視点から、よく用いられている。

S・ヘス＝バイバーとJ・ウィリアムソンによれば、資源とは、家族員のそれぞれがお互いにニーズを満足させたり目標に達することを援助しあうすべてのものと定義される。資源理論とは、親と子が増加につれて両世代間の変化する勢力のバランスを例証するために、家族の相互作用の研究を応用するものである。現在の社会政策は、勢力や影響力の減退した高齢者が中年の子世代に依存しないように助けることである。夫婦において、パートナーの資源はライフサイクルを通

じて変化する。女性では身体的な魅力が、男性では経済的な能力が、それぞれ減退することになる。家庭外の就労の機会を女性に与えることによって、子育て後の女性の資源の減少が防がれるのである。一般に夫婦においては、加齢にともなって平等な関係になる傾向がみられており、勢力のバランスが保たれている (Hesse-Biber & Williamson, 1984)。

D・L・ホヤートは、1987年ならびに1988年の全米家族調査のデータを活用し、成人子をもつ1650人の高齢の親について、世代間の交換パターンを分析し現在の家族関係を明らかにしている。それによれば、家族は過去の関係によって成り立っているが、家族員のニーズに応じて変化し異なり、また家族内の多くの親子関係は相互作用パターンをもっていると報告している。(Hoyert, 1991)。

世代間のサポートについて焦点をあてる研究も多くみられる。

B・D・レボビッツは、家族の機能の側面から、つぎの2つの問題に焦点をあてている。ひとつは、近代のアメリカ合衆国の家族の機能的な統合性の水準が低下していること、もうひとつは、機能的とされる家族でさえも、孤立した高齢の家族員には対応していないことである。しかし、ほとんどの高齢者は、こうした問題に対応するためにサポートのための親族ネットワークをもっている。とくに3世代同居家族では、情緒的な結びつき、家事や育児の分業、高齢者にとってのケア機能などといった、お互いに多くの利益が得られている。フォーマル・サポートとインフォーマル・サポートとの関係に関する系統的な研究、ならびに家族の機能を強化するプログラムに関する研究が必要とされている (Lebowitz, 1978)。

E・S・スティーブンスは、アメリカ南西部の都市部に住む60歳から90歳までの108人に対する質問紙調査によって、家族関係と高齢期の満足度について調査している。その結果によれば、家族サポートの授受における相互依存関係は、高齢期の満足度を左右しており、サポートを与えている高齢者は、より大きな満足を得ている。(Stevens, 1992)。

世代間関係に関する研究では、連帯性 (Solidarity) に焦点をあてるものも目立っている。

R・E・L・ロバーツらの論文でも、家族における世代的な連帯性が問題にされている。ここでは、つぎの4つのテーマに関する議論がおこなわれている。連帯性の基本的な行動や態度の要素に関する歴史的・理論的發展、連帯性における独自の要素の分類方法、世代間の家族の連帯性に関する水準の高低を測定する個人や家族の特徴の経験的研究、個人や家族の幸福 (well-being) にとっての世代間の連帯性の意味、である。そして世代間関係の研究は、理論的發展と経験的な実証とが緊密に結びつくことで進歩していくのである。(Roberts, Richards & Bengtson, 1991)。

アメリカでは離婚と再婚が繰り返されることによって複雑化した家族関係も多く、実子と継子の違いに注目する研究も多数ある。

たとえばD・E・ゲルフェンドらは、高齢化の問題への対処が高齢の親に対する経済的、心理的、社会的サポートへの要求によって複雑化していると指摘する。第2世代 (子世代) は、年齢に対応した役割の移行に直面しており、そうしたサポートを提供できない状況にある。親と子の両世代とも、自分自身の加齢の過程に対処すると同様に、その過程によって生じる家族関係の変

化に対処している。外部のサービス提供者は、こうした家族関係を強化するための相互作用をおこない、そうした機会を最大限にする方策を理解しなければならないのである (Gelfand, Olson & Block, 1978)。

D・J・エッグビーンは、ホヤートと同じく、全米家族調査のデータの分析を通じて高齢の親と非同居の成人子における援助の交換と家族構造との関係を調べている。総合的にみてサポートは高くないが、とくに配偶者を失ったり離婚した親は子に対してあまりサポートを与えていない。離婚の経験がなく配偶者を失った親は、サポートをよく受けている。子の婚姻状態は、交換過程にとってそれほど重要ではないとしている。多くの成人した子は、サポートの授受のための強い肯定的な関係をもっているが、継子であることは、サポートを受けるのに強い否定的な影響力をもっている (Eggebeen, 1992)。

とくに祖父母と孫 (あるいは曾祖父母と曾孫) に焦点をあてた研究は、アメリカ合衆国においても比較的少数であったが、長命化による高齢期の長期化が明らかとなった1980年代からは盛んにおこなわれだしている。

H・キブニックは、祖父母である30人に面接調査および286人に質問紙調査をおこない、祖父母になることが生活満足度やモラルに対する補償的な機能をもっており、高齢者の精神的健康の向上になることを示している (Kivnick, 1981)。

L・トロールとV・L・ベングツソンは、ロサンゼルス市における85歳以上の後期高齢者の家族関係を分析し、高齢者世代が祖父母として家族をまとめる役割を担っていることを明らかにする (Troll & Bengtson, 1992)。

## 第2章 ネットワーク論からの研究

### 1 家族・親族とネットワーク構造

家族ネットワークの古典的な文献となったM・B・サスマンとL・G・バーチナルの論文は、離れて暮らす高齢者と家族の間にも相互援助が存在することを修正拡大家族という形態で明らかにしており、盛んにおこなわれだした家族ネットワークと相互援助パターンに関する調査の知見をつぎのように整理している。相互援助には、サービス、贈答、助言、経済的な援助などの交換といった多様なパターンがあること、そのような援助パターンは、中産・労働者階級にも広くみられ家族を統合するものであること、家族における援助の交換は、親子間だけでなくきょうだい間などにもみられることなどをあげている (Sussman & Burchinal, 1962)。

その後も、高齢者の家族・親族ネットワークについての研究は豊富である。高齢期家族を社会的な対象とする場合に用いられるオーソドックスなアプローチになっていると言ってよい。

M・ベトロヴィスキーは、フロリダ州で配偶者喪失者128人と既婚者145人を調査し、高齢者の性別と婚姻状態が社会的ネットワークの形成におよぼす影響を探っている。その結果では、配偶者喪失者は、既婚者に比べて、家族や友人からも宗教組織の支部からも孤立しているわけではな

い。性別では、家族や友人との社会的相互作用に差異は示されていないが、男性は、とくに配偶者喪失者の場合には、宗教組織の活動への参加率が低下するとしている。(Petrowsky, 1976)。

E・P・ストラーは、753人の高齢者に対する面接調査のデータ分析によって、インフォーマルなネットワーク内の援助交換のパターンを調べている。援助を受けた高齢者のなかでは、通常では友人や隣人より家族との関係において一方的な援助となる確率が高い。援助が必要となる場合よりも、むしろ交換する能力が欠如したときに、モラルに大きなマイナスの影響があらわれると分析している。フォーマルなサービスの領域とインフォーマルなネットワークへの信頼とは、相容れない関係にあるとも指摘しているのである (Stoller, 1985)。

J・E・ルーベン、高齢者の社会的ネットワークを測定する尺度を開発している。ルーベン社会的ネットワーク尺度 (LSNS) は、病院の使用度、生活満足度、健康関連行動のチェックリスト、といった健康に関する3つの指標で構成されている。1982年にカリフォルニア州での高齢者調査において、この3つの指標に対する家族関係 (日常的に活用する家族ネットワークの範囲、親しい家族ネットワークの範囲、家族との接触度) および友人関係との関連性を調べた結果、すべてにおいて強い関連性が示されている (Lubben, 1988)。

B・R・パターソンは、60歳以下の104人と60歳以上の169人という2集団に対して、過去2日間の個人間コミュニケーションの状態の比較から、コミュニケーション・ネットワークにおける加齢との関係を調査している。ここで使っているコミュニケーション・ネットワークとは、とくに接触の側面に焦点をあてた社会的ネットワークのとらえ方である。60歳以上の人びとでは、60歳以下の人びとに比べて、友人や隣人といった非家族よりも家族とのコミュニケーションの頻度が高く、家族との連帯性のほうが高いレベルになっている。ただし、家族との連帯性自体についての違いはないという結果である (Patterson, 1995)。

ネットワークの日米比較の研究では、A・ハシモトが、ニューヨーク市近郊の西ハーベン市と神奈川県小田原市の西部における質問紙調査をおこない、高齢者のもつネットワーク資源の文化的比較の視点から、それぞれのネットワーク構造の特徴について明らかにしている。日本においては、地域社会との結びつきが弱く、世帯内の結びつきに集中しているのに対して、アメリカにおいては、成人子、親族、友人、隣人がネットワークの重要なメンバーのすべてとなっており、ネットワークが世帯外により広範囲に拡大しているのである。(Hashimoto, 1996)

## 2 サポートとしてのネットワーク

高齢者のもつ社会的ネットワークをサポートの資源としてとらえる研究は、近年でもっとも発展の著しいところである。親族のなかでは、きょうだいネットワークをサポート源としてとらえる調査研究が多くなっている。

M・S・モイヤーは、高齢者におけるきょうだいサポートがきょうだい自身と援助する専門家の両者によって十分に活用されていないことを問題にしている。親に対するケアのニーズは、あまり接触のなかったきょうだいを引き戻すことになる。家族構造の変化は、きょうだい関係がお

互いにサポートの唯一の源泉であることを意味している。親しい友人との関係との相違、離れて暮らしているきょうだい関係、死によって生じた役割の変化などに関する問題が議論されている。援助する専門家は、このようなきょうだいのダイナミックスの要素を考え、高齢者に対する感情移入を避けるためには自分自身のきょうだい関係に対する気持ちに素直となり、きょうだい関係をもつ青年層と同じように、高齢層もあつかうべきであると主張する (Moyer, 1992)。

I・A・コンニディスとL・D・キャンベルは、中年期と高齢期のきょうだい間の情緒的な親密性、信頼性、接触度に対する性差、婚姻状態、親の地位の影響を調べている。大都市においてきょうだいをもつ55歳以上の528人の回答者への面接調査から、きょうだいネットワークの特徴が明らかにされているのである。女性きょうだいをもつ人、独身者、子のいない人は、より活動的なきょうだいとの結びつきをもっており、きょうだい数、地理的な距離、年齢、学歴による有意差もみられている。また、情緒的な結びつきは信頼性と接触度を左右していることも明らかにしている。(Connidis & Campbell, 1995)

ネットワークにおける家族・親族と友人との関係も重要視されている。

J・A・マンシーニとJ・サイモンは、高層アパートに居住する高齢者に面接調査をおこない、援助の程度、親密性、社会的な統合性にかかわる家族と友人のサポートを明らかにしながら、インフォーマルなサポートの重要性を指摘している。一般には、家族員により広範囲のサポートが期待されているように考えられているが、友人に対する期待も十分に考慮する必要がある。家族よりも、気楽な友人を選ぶ場合もみられる。援助に関しては家族のほうに大きな期待があるが、他ではほとんど違いは示されず、高齢者のインフォーマルなネットワークの大きさは友人関係に規定されているとしているのである (Mancini & Simon, 1984)。

ネットワークにおける都市と農村との相違などという地域差の研究は、まだ少数である。

G・C・ヴェンガーは、農村に居住する高齢者のインフォーマルなサポート・ネットワークについて長期的な調査をおこなっている。サポート・ネットワークは、家族の有効性と近接性、および家族、友人、隣人、コミュニティとの関与レベルによって区分される。ネットワークのタイプは、健康状態、家族員の有効性、居住状態、婚姻関係などの変化、ならびに地域社会との相互作用、ケアへの責任感、社会的な引退、精神的病いのレベルの変化によっても決定されている (Wenger, 1990)。

P・エルリッヒは、農村と小都市における高齢者のインフォーマルなサポート・ネットワークと健康についてのニーズとの関係を探っている。施設に入所していない80人の高齢者への面接調査によって、地域社会を基盤としたインフォーマルなサポート・ネットワークと地域で日常活動をおこなうための高齢者の能力との関連を調べた結果、ネットワーク機能とネットワークの近接性が健康ニーズと大きく関わることを見いだしている (Ehrlich, 1985)。

また社会的ネットワークのコンボイ (護衛者) についての研究で知られている、T・C・アントヌッチとH・アキヤマは、50歳から95歳までの718人の高齢者とその家族ネットワーク (182人の成人子と60人の孫) に対して面接調査をおこない、ライフコースにわたって社会的サポートの

コンボイの内容を調べている。そこでは、世代間の類似性と異質性、世代間の結びつきの性質に影響を与える幅広い社会的・家族的な文脈で生じる変化、社会化の主要なエージェントとしての家族役割と世代間関係などが調査項目である。世代間の比較分析によって、回答者とその子におけるネットワーク構造とサポート機能に関する類似性が明らかになり、回答者と孫の間にはほとんど類似性は示されていない。多世代の家族員を含む社会的ネットワークのコンボイをもっている高齢者には、ネットワークのなかに子や孫をもたない場合に顕著であった性差による違いが最小限にしかあらわれないのである。コンボイ・モデルは、世代の違う家族員が肯定的にも否定的にもどのようにお互いに影響を受けあうのかについて理解するのに有効であると述べている (Antonucci & Akiyama, 1991)。

社会的ネットワークと健康との関係についての研究としては、M・E・モル＝バラクラの論文があげられる。彼らによれば、過去10年（1991年以前）の研究において社会関係と健康との肯定的な関係は明らかにされてきたが、その因果関係の解釈はおこなわれておらず、つぎの2点の問題が示されている。つまり、社会的ネットワークが、健康上の人生の出来事の否定的な影響に対する緩衝剤として働くのかどうか、主な人生の出来事の有無によって直接的な影響をこうむるのかどうか、ということである。1982年から2年間にカリフォルニア州の3559人の貧しい病弱な高齢者の社会的ネットワークと健康について調査したところでは、社会的ネットワークは健康に対して短期的に直接的な影響をおよぼすと同様に、長期的にも緩衝剤として働いているのである (Mor-Barak, Miller and Syme, 1991)。

複合民族国家としてのアメリカらしく、さまざまな民族系アメリカ人の高齢者と家族に関する研究もおこなわれてきている。

最近では、たとえばS・ブライアントとW・ラコヴィスキーが、アフリカ系アメリカ人に焦点をあてている。アフリカ系アメリカ人は、全体的な傾向として、行政などによっておこなわれるフォーマルなサポートサービスを利用することを避け、インフォーマルな社会的ネットワークを唯一のサポート源にしている。インフォーマルな社会的ネットワークは、家族員との接触、友人との接触、家庭外で社会的に関わりのある者との接触、といった3側面からとらえられる。教会と家族はアフリカ系アメリカ人の高齢者にとって、生きがいをもたせるようなサポート役割を演じているが、ただし家族との接触は減退の傾向にあるとしている (Bryant & Rakowski, 1992)。

### 第3章 ケア論からの研究

#### 1 家族・親族によるケア

高齢期家族における多様な研究領域のなかで、高齢者に対するケアをあつかう論文は1980年代から増加しはじめ、1990年代に入ると飛躍的に量産されるようになってきている。

R・ジャムシディらは、1990年の統計データから、高齢層の33%が何らかの医療的・社会的援



助を必要としていると述べている。高齢者へのケアは、家族のインフォーマル・ネットワークによるケア、施設と地域社会のケアのようなよりフォーマルな取り合わせ、老人ホームの組織的ケアに分けられるとしている。そこでは、「だれがケアを与えて、受けて、そのコストを支払うのか」、「どのようなタイプのケアが可能か」などが、とくに長期ケアでは問題となっているのである (Jamshidi, Oppenheimer, Lee, Lepar, Espenshade, 1992)。

高齢者への家族による長期ケア (long-term care) についての研究は、最近その増加傾向が際立っている。

T・H・ブルーベーカーとE・ブルーベーカーによれば、最近おこなわれた高齢者へのケア提供に関する全米調査では、第1次的にも第2次的にも家族がケア提供者となっており、ケアを受けた高齢者の80%から90%が家族によるものである。そして、アメリカ合衆国の長期ケアの問題点として、高齢層の増加と若年・中年層の減少、家族員によるケア能力の減退、ケア提供者のほとんどが女性、とくに妻と娘であること、ケア提供者としての女性のストレスの増大などをあげている。そして、社会サービスや政策の発展と同時に、家族・親族によるケアをさまざまな角度から再検討していくことが必要であるとしている (Brubaker & Brubaker, 1992)。

ケア提供者としての娘についての研究は、アメリカ合衆国の特徴としてよくおこなわれている。

E・K・アベルは、高齢者のケアをする平均年齢51歳の白人の娘に対する面接調査によって、その夫、子、きょうだい、友人、サポート集団といった多様な資源が見いだされ、家族と友人がストレスを軽減していると同時に、また増大もさせていることを明らかにしている。いっぽう批判的な援助を受けていても、自分自身のニーズを覆い隠しているケースもみられるとしている (Abel, 1989)。

E・P・ストラーらは、ニューヨークで少なくとも1人の子とは同居する高齢者を対象にして、社会的ネットワークとケアについて、つぎの3つのケースから調べている。成人子が援助者としてあげられているケース、成人子が社会的ネットワークにおける第1次的な援助者であるケース、少なくとも1人の息子か娘を含むネットワークのなかにいるケースである。この結果、息子は、娘より第1次的な援助者に選ばれる傾向があること、成人子が援助ネットワークに含まれるには地理的な近接性が重要となっていること、娘と他の女性家族員がケアのまとめ役となっていることなどが見いだされている (Stoller, Forster, Duniho, 1992)。

ケアの担い手としてのきょうだいに関する研究も、最近多くおこなわれるようになってきている。

V・G・シシレリらは、きょうだい間でおこなわれるケアを分析している。その内容は、1982年から1984年にかけて実施された長期ケア全米調査のデータを用いて、高齢者におけるきょうだいケアの特徴、およびそうしたケアの開始と終了の理由を明らかにすることである。1982年のデータ分析では、きょうだいケアを受ける高齢者は比較的若く、未婚者または離婚者、子をもっていない者、小都市の居住者である傾向がみられ、1984年では、同じく比較的若く、独身主義者、農村の居住者が多くなっているとしている。この結果として、きょうだいからの援助は、高齢者が機能的障害をもっているとき、あるいは成人子などの家族員からのサポートが不可能であるとき

に提供されることが明らかになったのである (Cicirelli, Coward and Dwyer, 1992)。

さきにブルーベーカーがあげたように、長期ケア提供者としての家族のストレスと対処に関する問題をあつかう研究も、最近は増加の傾向にある。

たとえばロングは、72家族のケア提供者を対象にして、ストレス、情緒、ケアに関する問題について調べ、それらへの対処行動に焦点をあてている。これによれば、ケア提供者は、親のケア状況でストレスを感じたときには、情緒に焦点をあてた対処行動をおこなっている。つまり、それを受容しなければならないと評価しているのである。この行動は、よりストレスを増大させる結果をまねくことになる。そして、こうした問題に焦点をあてた対処行動の重要性が強調されている。(Long, 1991)。

J・V・モンゴメリーとB・A・ヒルショーンは、1987年と1988年の全米家族調査から2718人の黒人と白人の高齢者を抽出し、長期ケアに対する家族の援助のあり方について調べている。第1次的には家族・親族がケアをおこなっていることを明らかにしたうえで、ケア提供者には多様な年齢・人種・性別があること、家族サポートのニーズは多様であること、家族の援助を受けているかどうかは家族によるサポート・ネットワークのあり方、あるいは高齢者自身の健康状態で決まること、を示している。また、女性の就労率の上昇、仕事とケアに対する考え方の変化などにより、大きな影響を受けることを示唆している (Montgomery & Hirshorn, 1991)。

## 2 家族と行政機関との連携

長期ケアにおける家族と行政機関との連携は、重大かつ緊急の問題として浮かびあがってきているようである。

T・H・ブルーベーカーは、長期ケアの三角形として、高齢者、その家族、行政機関の連携について考えている。連携に際して知っておくべき課題として、高齢者については経済的ニーズ、身体的ニーズ、社会的・情緒的ニーズを、家族についてはケアの一般的知識、その家族の特有の情報、特殊な事情を、行政機関については特殊な職務、技術的知識、構造的反応をあげている。これらの課題をお互いに考慮しあいながら、連携をしていく必要があるとしている。そして彼は、高齢者の長期ケアが個人と社会構造の相互作用の複合体を意味することを指摘し、高齢者と家族が1つのチームとなって行政機関に接近していくことを強調するのである (Brubaker, 1987)。

またB・C・スピルマンとP・ケンパーは、1984年の長期ケア全米調査のデータを分析し、長期にケアを受けている高齢者の73%がケアの私的な資源を使っており、子のいない人の35%が、また子や配偶者のいる人の80%が公的な資源を活用していないと報告している。今後の新しい政策では、インフォーマルなケアを受けているケースとそうではないケースの不均衡を埋めるかたちの公的な利益分配が必要であるとしている (Spillman & Kemper, 1992)。

M・ベアーは、フロリダ州における居住型ケア施設 (residential care home) の86人の新しい入居者への面接調査から、ケアの提供のやり方は、それまで高齢者のもっていたネットワークやケア提供者の特徴によって異なっており、家族と友人といったケア提供者ネットワークと切り

離して理解することはできないとしている (Bear, 1993)。

すでに前章で述べたように、同じアメリカ人でも民族系の相違によって家族や親族のあり方も異なっており、家族によるケアのあり方にもその特徴があらわれることになる。

たとえばT・L・ドイツは、1988年のヒスパニック系高齢者に対する全米調査から、メキシコ系アメリカ人における家族内の世代的援助のパターンを研究している。これによれば、メキシコ系アメリカ人の家族では、高齢者への情緒的サポートは可能な限りおこなわれているが、ケアの手段的ニーズには対応していない。むしろ、情緒的サポートが逆機能して、外部のサポートを妨げる場合もあり得るのである。家族と行政機関が連携する場合には、政策担当者や外部のサービス提供者が、こうした点を早期に検討する必要があることを指摘している (Dietz, 1995)。

## おわりに

このように、アメリカ合衆国における高齢期家族の研究は、豊富で多様なものである。今後も、高齢化や長命化が進行するほど、さらに発展していくことは確実であろう。ただし当然ながら、それでも課題は多く残されている。

たとえばブルーベーカーは、1990年代以降の高齢期家族研究の方向性について、つぎの7点の課題をあげている (Brubaker, 1990a)。

- 1 高齢期家族の研究において、理論に基づいた調査をおこない、理論的アプローチを発達させる必要性。
- 2 縦断的デザインの研究を継続していく必要性。
- 3 高齢期における家族パターンの質的分析の必要性。
- 4 民族的ならびに少数民族の相違点を探求する必要性。
- 5 性差を考察する必要性。
- 6 さらに個人、家族、行政の間の連携を探求する必要性。
- 7 健康と介護に関する諸問題の議論を継続する必要性。

こうした課題は、本稿で概観した研究をみてもわかるように、順次、解消されていく方向に向かっていてのものと思われる。逆に考えれば、豊富で多様な研究業績の積み重ねがあるからこそ、課題も明確化し多くでてくるわけである。

ところで翻って、わが国の高齢期家族に関する研究（とくに家族社会学においては）に目を転じてみるならば、老親扶養の概念からの研究への偏りが依然としてみられる。たとえば子から親への一方的援助という一元的な「老親扶養」の概念だけでは、わが国でも、高齢化や家族変動が避けられない状況である以上、今後の高齢期家族の研究には対応できないと考える。したがって、高齢者と家族との相互作用（コミュニケーション）などの研究をすすめ、多様な高齢者観をもつことが必要とされている。家族に含まれた高齢者ではなく、「個としての高齢者」のつくる家族というパースペクティブが不可欠となろう (安達、1996)。アメリカ合衆国における豊富な研究

は、われわれにこのことを気づかせてくれているのである。

(参考文献)

- Abel, E. K., 1989, "The Ambiguities of Social Support: Adult Daughters Caring for Frail Elderly Parents," *Journal of Aging Studies* 3, pp.211-230.
- 安達正嗣「高齢者世帯と家族・親族ネットワーク」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編著『いま家族に何が起きているのか：家族社会学のパラダイム転換をめぐる』ミネルヴァ書房、1996年、118-135頁。
- Antonucci, T. and Akiyama, H., 1991, "Convoys of Social Support: Generational Issues," *Marriage and Family Review* 16, pp.103-123.
- Bear, M., 1993, "Caregiver Networks, Elder Health, and Use of Residential Care Homes," *Adult Residential Care Homes* 7, pp.31-42.
- Brubaker, T. H., 1985, *Later Life Families*, Sage Publications.
- Brubaker, T. H., 1987, *Aging, Health, and Family: Long-Term Care*, Sage Publications.
- Brubaker, T. H., 1990a, "Families in Later Life: A Burgeoning Research Area," *Journal of Marriage and Family* 52, pp.959-981.
- Brubaker, T. H. (ed.), 1990b, *Family Relationship in Later Life* (2nd ed.), Sage Publications.
- Brubaker, T. H. and Brubaker, E., 1992, "Family Care of the Elderly in the United States: An Issue of Gender Differences?," in Kosberg, J. I. (ed.), *Family Care of Elderly: Social and Cultural Changes*, Sage Publications, pp.210-231.
- Bryant, S. and Rakowski, W., 1992, "Predictors of Mortality among Elderly African-Americans," *Research on Aging* 14, pp.50-67.
- Cicirelli, V. G., Coward, R. T. and Dwyer, J. W., 1992, "Siblings as Caregivers for Impaired Elders," *Research on Aging* 14, pp.331-350.
- Connidis, I. A. and Campbell, L. D., 1995, "Closeness, Confiding, and Contact among Siblings in Middle and Late Adulthood," *Journal of Family Issues* 16, pp.722-745.
- Coward, R. and Cutler, S. J., 1991, "The Composition of Multigenerational Households that Include Elders," *Research on Aging* 13, pp.55-73.
- Daniewicz, S. C., 1995, "When Parents can't Live Alone: Choosing Multi-Generational Households," *Journal of Gerontological Social Work* 23, pp.47-63.
- Dietz, T. L., 1995, "Patterns of Intergenerational Assistance within the Mexican American Family: Is the Family Taking Care of the Older Generation's Needs?," *Journal of Family Issues* 16, pp.344-356.
- Eggebeen, D. J., 1992, "Family Structure and Intergenerational Exchanges," *Research on Aging* 14, pp.427-447.
- Ehrlich, P., 1985, "Informal Support Networks Meet Health Needs of Rural Elderly," *Journal of Gerontological Social Work* 9, pp.85-98.
- Gelfand, D. E., Olson, J. K. and Block, M. R., 1978, "Two Generations of Elderly in the Changing America Family: Implications for Family Services," *The Family Coordinator* 27, pp.395-403.
- Giordano, J. A., 1988, "Parents of the Baby Boomers: A New Generation of Young-old," *Family Relations* 37, pp.411-414.
- Hashimoto, A., 1996, "The Gift of Generations: Japanese and American Perspectives on Aging and the Social Contract," Cambridge University Press.

- Hesse-Biber, S. and Williamson, J., 1984, "Resource Theory and Power in Families: Life Cycle Considerations," *Family Process* 23 pp.261-278.
- Hoyert, D. L., 1991, "Financial and Household Exchanges between Generations," *Research on Aging* 13, pp.205-225.
- Jamshidi, R., Oppenheimer, A. J., Lee, D. S., Lepar, F. H. and Espenshade, T. J., 1992, "Aging in America: Limits to Life Span and Elderly Care Options," *Population Research and Policy Review* 11, pp.169-190.
- Kivnick, H., 1981, "Grandparenthood and the Mental Health of Grandparents," *Ageing and Society* 1, pp.365-391.
- Kulis, S., 1987, "Socially Mobile Daughters and Sons of the Elderly: Mobility Effects within the Family Revisited," *Journal of Marriage and the Family* 49, pp.421-433.
- Lebowitz, B. D., 1978, "Old Age and Family Functioning," *Journal of Gerontological Social Work* 1, pp.111-118.
- Long, C. M., 1991, "Family Care of the Elderly: Appraisal and Coping," *Journal of Applied Gerontology* 10, pp.311-327.
- Lubben, J. E., 1988, "Assessing Social Networks among Elderly Populations," *Family & Community Health* 11, pp.42-52.
- Mancini, J. A. and Simon, J., 1984, "Older Adults' Expectations of Support from Family and Friends," *Journal of Applied Gerontology* 3, pp.150-160.
- Montgomery, R. J. V. and Hirshorn, B. A., 1991, "Current and Future Family Help with Long-Term Care Needs of the Elderly," *Research on Aging* 13, pp.171-204.
- Mor-Barak, M. E., Miller, L. S. and Syme, L. S., 1991, "Social Networks, Life Events, and Health of the Poor, Frail Elderly: A Longitudinal Study of the Buffering versus the Direct Effect," *Family & Community Health* 14, pp.1-13.
- Moyer, M. S., 1992, "Sibling Relationships among Older Adults," *Generations* 16, pp.55-58.
- Patterson, B. R., 1995, "Communication Network Activity: Network Attributes of the Young and Elderly," *Communication Quarterly* 43, pp.155-166.
- Petrowsky, M., 1976, "Marital Status, Sex, and the Social Networks of the Elderly," *Journal of Marriage and the Family* 38, pp.749-756.
- Plath, D. W., 1972, "Japan: The After Year," in D. O. Cowgill and L. D. Holmes (eds.), *Aging and Modernization*. New York: Appleton-Century-Crofts, pp.133-150.
- Roberts, R. E. L., Richards, L. N. and Bengtson, V. L., 1991, "Intergenerational Solidarity in Families: Untangling the Ties that Bind," *Marriage and Family Review* 16 pp.11-46.
- Shanas, E., 1980, "Older People and their Families: The New Pioneers," *Journal of Marriage and the Family* 42, pp.9-15.
- Spillman, B. C. and Kemper, P., 1992, "Long-Term Care Arrangements for Elderly Persons with Disabilities: Private and Public Roles," *Home Health Care Services Quarterly* 13, pp.5-34.
- Stevens, E. S., 1992, "Reciprocity in Social Support: An Advantage for the Aging Family," *Families in Society* 73, pp.533-541.
- Stoller, E. P., 1985, "Exchange Patterns in the Informal Support Networks of the Elderly: The Impact of Reciprocity on Morale," *Journal of Marriage and the Family* 47, pp.335-342.
- Stoller, E. P., Forster, L. E. and Duniho, T. S., 1992, "System of Parent Care within Sibling

- Networks," *Research on Aging* 14, pp.28-49.
- Sussman, M. B. and Burchinal, L., 1962, "Kin Family Network: Unheralded Structure in Current Conceptualizations of Family Functioning," *Marriage and Family Living* 24, pp.231-240.
- Troll, L. and Bengtson, V. L., 1992, "The Oldest Old in Families: An Intergenerational Perspective," *Generations* 16, pp.39-44.
- U. S. Bureau, 1990, "Marital Status and Living Arrangement," *Current Population Reports*.
- Wenger, G. C., 1990, "Change and Adaptation in Informal Support Networks of Elderly People in Wales 1979-1987," *Journal of Aging Studies* 4, pp.375-389.